

ロートシルドの胡弓（チェホフ）：文苑

著者	和田, 鞆, Chekhov, Anton Pavlovich
雑誌名	龍南會雜誌
巻	1 4 1
ページ	2 2 - 3 5
発行年	1911-06-05
その他の言語のタイトル	ロスチャイルドのバイオリン
URL	http://hdl.handle.net/2298/6223

文苑

ロートシルドの胡弓

(チエホフ)

田 (譯) 輒 (下頁)

比較的大きな鳥渡した村よりも、貧寒な小さな町であつた。住んで居るのは殆ど老人ばかりで、而かも不思議な程、其中に死ぬものが少い。人の家にも病院にも尙又監獄にも棺桶の必要がないのだ。

一口に言へば商賣が不景氣だ、ヤコブ、イバノヴがもし城下であの桶屋を營んで居たなら、今頃はもう立派な家でも出来てゐる筈だけれど此の町か彼廢具合だから田舎の水呑百姓も同様に矢張貧乏だ。

彼は妻と一所に古い、小さい、低い、一間家に暖爐と棺桶と、仕事臺とを、友として住んでゐる。彼の家の經濟を作り出すものは後にも先にも此等ばかりだ。

ヤコブが仕上げた棺は美しくて堅牢だ、既に七十の坂へ達したけれど、町中には監獄の中にも彼れた勝あて大きな強い人はないので、自分の大きさを標準として町民や百姓の棺は寸法も度らず、億面もなく造る、僧侶や婦人のは寸方を取る、これには鐵の米突尺を使ふ。小供用の棺を請合ふのは全く好まない其磨のは寸法なほに輕蔑して念を入れず拵へる、其代金を貰ふべきはいつても、實際の處眞直に白狀すると此磨、つまるなむ仕事をするのは嫌だ、さういふのだ。人々を、

此外這彼れは内職に胡弓を弾ひて少しばかりの収入が有る。結婚式や其他の場合に町や近郷で何時も囃をやる。錫器屋のモコゼス、イリツチが其監督をやるで、モコゼスは収入の半分を分前に取る。

アヤコゾは旨く弾く。殊に魯西亞の唄が旨いので、モコゼス、イリツチからも時々招かれて、仲間入をしては聴衆の呉れる報酬以外に五十コロペーゲンになる。

囃を始めるアヤコゾの顔は赤く目が潤うて来て、愈々熱して来ると蒜ヒヤクのやうな臭がする。胡弓が震ひ聲に響く、右では大提琴が吠へる。左では笛が鳴く。笛吹は髪カミの赤い痣のある瘡かさせれた猶太人で、笛を吹く時には顔が赤と青との血管の網で掩はれる。名をロートシルドといふので有名な富豪の名前を思ひ浮ばせる。

此猶太人が甚麼歌を吹いても、縦合最も愉快なものを吹いても、今く悲しげに聞ゆる。其間囃全体これといふ何れ原因があるでもないが、アヤコゾは漸々猶太の人間を憎み輕蔑し始め殊に其手拍テウパルををさうした。喧嘩をやめだす。人の前で彼れを辱しめる。更に其上毆らうとまでした。ロートシルドはそれがかため凌辱を受けたと思ひアヤコゾを静に打目守マモリながら、若も貴公を上手と思はにや、己れはまう疾に、貴公を抛り出して居るだけごとと言つて泣き出した。

此の原因からアヤコゾは滅太に囃の仲間入に呼ばれないやうになつた。呼ばれるのは單に猶太人が其仲間仲間に居ない時に限つた。

アヤコゾは絶えず大損を喰つてるので何時も全く不平たらしくだ。例へば日曜と金曜に働くのは大罪障だと考へられて居るから、此の日に働く譯に行かぬ。そ二ヶ年に積ると手を懐懐にして遊ばねばならぬ日が凡三頁相あたる。これは損失だ。町で結婚があつたが囃に招かれなかつたので亦之れも損失だ。町の警署官が五年以

來病氣勝であつて城下へ醫治を受けに行つたが死んでしまつた。これもまたヤコブに少くも十留の損失である。何故かと言ふは若し警察官が此の町に止まつて居たなら、光澤華で掩うた棺桶を一個押せるのみ筈だつたから。此の大損を避けるに、胡弓を置くが常で、例の馬鹿な考が頭腦に浮んで來ると弦の調子を合せて弾く、それで氣が輕む様な感じがする。此の考は其の間、對昨年の五月六日マルタが突然病氣になつた。老妻は苦しい、重い息をついて水をがぶ、呑みして蹠踉して居る。それを朝早くから自分でストオオに火を入れ井戸の水まで自分で酌んだ。夕方になつて寢込んだ。ヤコブは終日胡弓を弾いた。大分暗くなつて來た頃店から平素損失を記入して居る帳を持ち出して來て無聊のあまり損失を計算し始めた。總額は夥しい一千留以上だ。これには驚いた。腹も立つ、帳を床へ投げ付けて足で踏んだ。顔が赤黒くなつて汗の玉が宿る。若しこの一千留を銀行へ預けて置けたなら利息だけでももふ凡四寸留になる。だからこの四十留も亦損失だ。一言を以て覆へば眼にふれるもの。凡これ損失でないものはない。」「お所夫。私死にさうです。マルタが思ひがけなく呼んだ。彼は妻を見た。顔は熱赤くなつて居るが驚くに過ぎなく快げない。不斷はいつ見ても青白く憶々して悲しげだったので、ヤコブは不安になりだした。此の氣色の氣色はいかにも死に行く人に似て居る、而かも此の家、此の桶棺、此のヤコブを永遠に捨て去つて死に行くのを喜ぶ人のやうに。部屋天井を凝視して唇を動かす。彼の女の救濟者なる死の神がもつ眼の前に現はれて、それと話して居るかのやうに。いつもより顔色が幸福さまで、温和である。

遠く既婚の紅な東天が認められる。此の考は其の間、對昨年の五月六日マルタが突然病氣になつた。老妻は苦しい、重い息をついて水をがぶ、呑みして蹠踉して居る。それを朝早くから自分でストオオに火を入れ井戸の水まで自分で酌んだ。夕方になつて寢込んだ。ヤコブは終日胡弓を弾いた。大分暗くなつて來た頃店から平素損失を記入して居る帳を持ち出して來て無聊のあまり損失を計算し始めた。總額は夥しい一千留以上だ。これには驚いた。腹も立つ、帳を床へ投げ付けて足で踏んだ。顔が赤黒くなつて汗の玉が宿る。若しこの一千留を銀行へ預けて置けたなら利息だけでももふ凡四寸留になる。だからこの四十留も亦損失だ。一言を以て覆へば眼にふれるもの。凡これ損失でないものはない。」「お所夫。私死にさうです。マルタが思ひがけなく呼んだ。彼は妻を見た。顔は熱赤くなつて居るが驚くに過ぎなく快げない。不斷はいつ見ても青白く憶々して悲しげだったので、ヤコブは不安になりだした。此の氣色の氣色はいかにも死に行く人に似て居る、而かも此の家、此の桶棺、此のヤコブを永遠に捨て去つて死に行くのを喜ぶ人のやうに。部屋天井を凝視して唇を動かす。彼の女の救濟者なる死の神がもつ眼の前に現はれて、それと話して居るかのやうに。いつもより顔色が幸福さまで、温和である。

「キコブは熟々と妻の顔を眺めて斯う考へた。結婚して以來、彼は一度も妻を可愛がつた事はない。頭巾を買
うを遣らふ又結婚式の囃に出たら御馳走を持ち歸つて遣ふ、といふ氣になつた事はまだない。却て常に怒鳴り
つけ、荒々しく當つてあの損失の當り句に拳を振り上げた事もある。尤も毆つた事はないが、キコブは其都度
う動けないやうになりはすまいかと非常に驚き怖れる。

其上茶を飲むのは全く金の費へるばかりだから飲んでではならぬ、と禁止せられてるので湯で甘んじて居る
キコブは何故妻の顔に彼塵に喜びの色があり、と表れたのが急に、胸が騒いで悲しくなつた。夜が明け
放れるを待ち兼ねて隣家から馬車を借り妻を乗せて病院へ行つた。患者が少いので長くは待つに及ばなかつ
た僅三時間位しか、

式其時病院の博士が不精なので軍醫のマキシム、ニコライチといふ老人で町では好酒家で喧嘩奴ではあるが
博士よりも上手だとの評判のある人が診察して呉れるとの事だから、大變喜ばしく満足に思ふた。キコブは
纏や言ふは診察室へ妻を導いてマキシムに向ひ、

「先生様、御機嫌様で御座りますか恐れ入りますが少々御面倒を御願したう御座りますので、家内が入様の
たゞ池やる通致私の一生連添ふ女が、氣分が悪いやうです。何卒一ツ見てやつて下さりませ、へイ、御免
下さりませ。」

斑白の眉毛を寄せて頬鬚を片手に觸りながらマキシム、ニコライチは椅子に頸垂れを坐つて居る尖く笑つ
た鼻、横顔では渴いた鳥のやうな口をした女を鋭く視詰めた。

「マキシム、ニコライチ、軍醫先生は深く呼吸して徐に話す。『インフルエツツ、熱中病、』いや多分チブスだ――

町に澤山オズを流行して居る。其土隨分年を取つて居るやうな奴、幾歳かね？」

「聖六才九に過ぎぬのさ御座ます。」

「御座るやうな残も惜うはないが、充分な長命だよ、もう彼の世を嫁入りして来た世だ也。」

「丁寧に出て愛嬌の微笑を湛へて答へた」

「お何卒御診察をやらせて下さりませ、甚麼蟲蟻姑でも命は惜いものでない。」

「此の老女の生死は自分の手の中で甚麼にでもなるかの程りな一種の聲で答へた。」

「此の粉薬を次に來るまで一日に一服宛二廻吞ましなさい、」

「左様な病の病士は不潔な軍醫のツキを、」

「其顔色が悪く到底甚麼薬でも癒らこの豫期は出來ぬと讀めた。マルタは直ぐ」

「今日迄なれば明日は死ぬ事か明白に解つた。」

「もし、先生、家内に吸血杯をかけてやつて下さいませ。」

「其腕を烏渡突いて小聲に、」

「其腕を烏渡突いて居るの、」

「其腕を烏渡突いて居るの、」

「其腕を烏渡突いて居るの、」

「其腕を烏渡突いて居るの、」

「其腕を烏渡突いて居るの、」

「其腕を烏渡突いて居るの、」

「彼はホット溜息を吐いた。

老妻は動が静かに眼を閉ちて臥である。晩になつて部屋の内が眞暗になつたとき、ヨネを呼ぶ聲が聞かれた。

「所夫、思ひ出しばしませんか。」なつがしきは夫を眺めて。「思ひ出すでせう、それ五十年前神様は金色の捲髪の娘を授け下さつたのを、其時分はあの柳の木の下の方岸に坐つて唄を歌つて——」淋しく微笑して言葉を送じた。「その子は死んで了つた。」

亮利は力めて記憶を呼び起したけれど子供も松の木も浮んで來ぬ。「た前、夢を見てゐるんたらう」と答へた。僧が來てマルタは懺悔して最後の塗油式を受けた。朝頃永眠した。

隣の老婆共が湯灌して着物をぎせ棺に入れた。僧は自分の經文を讀み、祈禱をした。自分の祖父が墓地の番人を務めて居たので墓地には一文もかぶらなかつた。

「四人の男がヤコブに對する親切又義理の爲め、棺を寺の庭へ擔いで行つた。棺の脊後は老婆共及乞食さぞは二人の自痴が附いて行く、葬式の伴人は皆十字を切つた。ヤコブはすべての事が敬虔に、しかも安價に行つたことに満足した。

「マルタに最後の別をしたとき彼れは再び手を棺の椽につかへて、「いゝ細工だ」といふた。寺游りの歸途に非常に悲しくなつた。——自分の氣分も悪く感じ呼吸が熱く重苦して足が運ばぬ。激しく渴く。」

加ふるに彼の頭の中には種々の考へが互に相衝突して居た。彼はまた思ひ出した。自分はマルタの生涯中優しくしてやらす可愛がってやら無かつた。親切な言葉もかけなかつた。

五十年の間同穴に棲つた——仲々長い年月である——この長い間犬か猫かのやうに本當に可愛がってやらなかつた。でも彼の女は毎日／＼竈に火を焚き糞焚をし水を擔き薪を割り、又一ツの床に添寝した。何處かの結婚の祝から酔拂つて歸つて來たなら、氣を附けて胡弓を受取つて壁にかけ、床へ連れ込んで寢させた。いつも靜かに哀れな心配さうな顔でさうした。彼女は死ぬ迄其悲しげな顔を棄てなかつたのだ。

ロートシルドは愛嬌よく會釋してヤコブの方へ向つて來る、

「^{トッ}祖父さん已れあ貴公を探して居たんだ。モーゼスイリツチがよろしくいつたせ、すぐ來て呉れとよ」
「^{トッ}止せッ」ヤコブは答へて歩み續ける

「然しそれあいかんよ。」ロートシルドは思ひ切つて道に立ち塞つた。「モーゼスイリツチが怒るよ、貴公がすぐ來るやうにとの命令だ」

猶太人が其^{そん}麼^なに眞劍になつて眼を閉めかし、顔に赤い痣が澤山に見へるのが癩に障はる、矢鱈に黒い汚^{しみ}斑のある青い上衣、弱々しい折れさうな瘦せた指が眼障になる、

「我れあ何んで己れに付き纏ふんだ。^{ニククイ}赤食奴。せかせかいふなイ」

貴猶太人は忿つて大聲に

「^{トッ}少し靜にござろ。そんなにすると貴公は此垣を飛越すかも知れない。」

「除は、己れの眼の前でくづかすな」キコブは怒鳴つて拳を堅めて飛びかゝらうとした。「へん誰れが貴様のやうな奴に止められるもんか、疥癬かき」

「エー！ シルドは驚いて身体が凍んで頭上にヤコブの拳骨を防ぐかのやうに両手を翳して、グイと突つ立ち駆け出して、逃げた、手真似をしながち。猶太人の瘦長い脊中が始終慄へて居るのが見える

子供等が得たりとロートシルドの後を追かけて「猶太」「猶太」「猶太」「猶太」と言る、犬も子供に習うて吠ねなち憐れな猶太人を追かける」

皆な人がドツと笑ひ出す、さてはシーシーと吐聲する、犬は益々吠ね狂ける、………遂に自棄氣味の救助を呼ぶ苦痛の叫が聞ゆる………犬に咬まれたらしい。

「ヤコブは目的もなく草原を越えて町の裏脊を過ぎ行く。………子供はまたヤコブの脊後から「ヤコブ」「ヤコブ」と叫ぶ。

河へ来た。鵜が彼方此方と鳴きながら飛ぶ、水中には鴨がガアガア鳴く。………日はまだ高く暑い。水が眩くキラ／＼光る。

「ヤコブは川傳ひに小道を辿る。肥満して頬の赤い女が水浴から擧つてくる。こら「川獺奴」と獨語する。水浴して居る人々から餘り遠からぬ處に子供が四五人蟹の肉で魚を釣つてゐる。ヤコブを見ると腹立つたやうに「ヤコブ」「ヤコブ」と叫ぶ。

………向に古い柳の本が見ゆる鴉の巢がある、大きな坑がある、………忽ち自分の前に現れる、生きてゐるかのやうに、あのマルタが話した金色の捲髪の小な娘とまた柳の木が。

この柳だまみどりの静かな、哀れな、幾程年を取つて居るだらう。可愛相な柳だ。彼は柳の下に腰を卸して過去を追懐し始めた。

令艸原になつてゐるあの岸に、あの時分は、白樺の古い森があつた。遙か遠い水平線のほゞり禿山の上に古い大きな樅があつて水の上には荷船が浮んでゐた。

今は皆んな平滑で禿げてゐる。其上に一本白樺がある。小娘のやうに幼い柔いのが。川の上には鴨や鳶鳥が游んで荷船は見られぬ、其上今日は昔よりも鳶鳥の数が少い。ヤコブは眼を閉ぢて白い鳶鳥の群が自分の側を過ぎ行くのを思ひ浮べる。

この五十年の間全く川へ來た事がなく川を何にも氣に懸けなかつた事は甚麼な積りだつたか譯が解らぬ。川は大分大きい。小流ではない。此の川で魚が釣れる、其れを商人や官吏や驛長に賣つて、銀行へ、金を預ける事が出来るだらう。小舟を村から村へと漕ぎ廻つて胡弓を弾く、人々が賃を呉れる。荷船に商品を積んで運ぶ事が出来る。此塵事は棺を作るよりは慥に儲が多かつた筈だ、鳶鳥を飼ふて冬になると殺して莫須科へ送る、鳶毛ばかりでも十留になるのだ。

然し彼れは時期を過して了つた。其中の何れもしなかつた。

何ンで損だらう。ア、大損だ、若しヤコブは胡弓彈奏の傍、或は魚を漁り鳶を飼うて屠殺し商品を荷舟で運送してゐたら甚麼に金を溜めて居ただらう。

然し世の中は舊と同じものはない。夢に於てさへもさうだ。人生は何の快樂もなき無意味に過ぎ去つた

徒費せられたのだ。服の煙草ほどの價值もない。彼れの前には最早何物も残つて居ない。後を顧れば巨損失より外に何物も見むぬ、損失、損失慄へ上るやうな大損失。

何故に人間は損失なく生活し得ぬのであらうか。何故に白樺や樅は伐れたか？是が疑問だ。

何故に柳は使用せられずに残つて居るのか？

何故にヤコブは一生妻を罵り怒鳴り拳を振り上げ惱まし苦めたか。

何故人間は生存するがために相互に苦め合ふか？

惣ては損である、莫大な、計るべからざる損耗である。

人間の中に嫌疑、邪惡といふものがなかつたなら何にもた互に損失なく暮して行けるだらう。

夕方になつても夜に入つても常に小兒と、柳と、殺したての鷺と、大に渴して飲を欲する鳥に似たるマルタ

と、ロートシルドの青い悲しげな面相と、大きな口を開いて自分の周圍をあちこちと蠢き廻り四方八方から攻

め立て、只管損失を哀訴する多くの人々の顔とをヤコブは見る、

彼は幾多も寝返りして少くとも五回胡弓を弾からうと闇の中へ立つた。

翌朝やつと早く起き出で病院へ行つた。

例のマキシム、ニコライチはまた彼れに頭を冷やし散薬を服めと勧めた、然し其顔色でヤコブは自分の容

体が悪くて冷奄も散薬も効能はないと悟つた。

家へ歸つた。が死の神は我れに利のみを授けるやうな氣がする、何も食ふ必要も飲む必要もない、義捐金

を拂ふ必要も人を怒鳴る必要も辱しめる必要もない。一休人間は一年どころでなく百年も千年も墓の中に居

るのだから、全体を計算すると其儲、利益は莫大なものだ。

人間も生は只――損失を意味するのみ。死は只――利益を意味するのみだ。尤もこれは争論する必要がないが、でも憂い苦しむ。何故だらう。一体世の中は何ンで生は人間に一度しかなくて而かも全く鑑一文の利益もなく過ぎ去るやうな不可思議に規定せられてあるかが解らぬからだ。ヤコブは死を厭はぬ。然しそれでも家へ歸り着いたときは心が重くなつて悲しく胡弓を視詰めた。

胡弓や墓の中へ提げて行けぬ孤獨で留つてあの白樺や樅の木と同様の運命に遭遇するだらう。浮世の萬物は果敢ないもので遂に水と逝き去つて了ふのだ。

ヤコブは室を出て入口の闕の上に坐つて胡弓を胸に縛と擁き締めた。只僅に損失のみを齎したる誤れる生涯を懐ひ回らして弾き始めた。自分ながら何を演奏するか知らぬ嬌々たる響は訴ふるが如く悲むが如く骨身に徹るか如く水晶の露が彼の頬を流れる、思ひ廻せば廻すほど愈々胡弓の響が悲しみを帯びてくる。門口の鳴子が鳴つてロートシルドが這入つて來た。彼は前壺の中程までは大膽に横切つて來た、がヤコブを見ると躊躇して立ち止り、時間を知らせるかのやうに指で合圖をした。

「此方へ來い」ヤコブは親切に話しかけた「すつと這入れ」

然しロートシルドは彼れの案内を信用せず彼れを恐れて大分離れて立つ。

「モーゼス、イウツチがまた己れを使に遣したよ、貴公が居なくちやどうも都合が悪い――水曜に結婚がある。實際大結婚が――シアポバ王さんが娘子を或る立派な若い男に嫁るそうだ、旨い儲けになるだらう

よ、ウム」

「已れの仲間入や出来ん」苦しげな臭氣を吐いて「兄弟、已れの病氣だ……」

又ヤコブは弾き始める眼から涙が流れ出て胡弓の上に落ちる、

「ロートシルドはヤコブの側に立ち手を拱いて熱心に聞き入る、

不安な驚ひた顔が段々と悲しさうな色に變る、眼を閉ぢる、面白くて夢中になる稍高く長く引張つて「ア

面白……」

涙が瘦せたロートシルドの頬を流れる古い、汚班のある外衣を引き被つた。

ヤコブは其後終日獨で臥てゐた。晩方僧が來て最後の塗油式を授げヤコブが懺悔したとき僧は恐らく別に

格別な大罪障を感せぬかと質いた。彼れは記憶を喚ひ起した。またもやマルタの悲しげな青白い顔が目の前

に髣髴する、ロートシルドがあのだに咬まれたときの自棄氣味の苦しきまぎれの叫が聞ゆる、

聞き取れぬやうな聲で「あの胡弓をロートシルドに遺送て下さいませ。」

「左様しませう」と僧は答へた……

今では町の人々がロートシルドは彼麼な立派な胡弓を何處から得たかと尋ねる、買うたのか、盗んだのか、

また誰れが、彼の所に質入をしたのか。

彼れはもう久しいこと笛をやめて胡弓だけ弾てゐる、弓の下から絃の佳調が流れ出る、以前に笛から出た

やうな哀れな音調が

然しヤコブが死ぬるすぐ前に鬨の上で弾いたのを試ると非常に悼ましい哀れな悲しい音が出つ來て聴衆を

泣かし自身までも遂には涙を流して悲しさうにア……と嘆ずる。

痛かも其の歌は商人にも官吏にも町の人にも皆なに非常に氣に入つた、それが爲め毎日々々二度ならず二度ならず十廻までも招かれた。(完)

昨日 今日

栗 林 卯 平

(一)

田崎はこの頃不思議な夢を見る様になつた、灰色の寂しい別天地を夕方になると、いつも一人で歩いて居る。力無い夕日は涯しも知れない大曠原を斜に照らして總てが褐色に枯れた、草叢の間を、糸の様に縫うた、小路を田崎は唯だあてもなく歩いて行く。

脚下には深さも知れない底の底で、闇から闇へと通り過ぎる、恐怖の流と云ふ様なものが、ゴウゴウと絶え間もなく流れて、其の音を越した向うには、死んだ佐々木の姿が光もなく立つたまゝ、コチラエノとさし招くので、ついて行くと、たきまりの様に自分も佐々木と一所に死んだ夢を見る。

一体なせ、こんな夢を見るだらう。

神經の疲れから、こんな悪夢が起るにしても、昨夜も其の前の晩も、こうした同じ夢を見るとは何かの前兆がないとも限らない。一体なせだらう。

目がさめると田崎は獨りて裏庭に出た。ポカポカと暖い春の日は、一面に柔かい光を草や庭木の上になげで